

就労を困難にする自閉症スペクトラム児の症状の分析

平林 計重

The symptom that makes the working of the autistic spectrum person difficult

Kazushige HIRABAYASHI

キーワード：自閉症スペクトラム 発達障害 就労継続支援施設 就労訓練 障害の克服

1 はじめに

自閉症スペクトラムの子供たちが学校を卒業して就労しようとする場合、それぞれの子が持つ自閉症スペクトラムの症状が様々な困難を生む。

自閉症スペクトラムの症状は、以下のよう
な内容で示される。(DSM- 5 より)

- (1) 対人的・情緒的相互関係の欠陥
 - (2) 対人相互反応に使用される非言語的コミュニケーション行動の欠陥
 - (3) 人間関係を発展させ維持することの欠陥
- こうした社会性やコミュニケーション上の問題のほかに、行動、興味、活動上の以下のような症状も併せ持つ。
- ① 常同的または反復的発話、運動動作、または物の使用
 - ② 同一性への固執および習慣への過度なこだわり
 - ③ 異常な強さと焦点を絞った限定された興味
 - ④ 感覚刺激に対する過敏さまたは鈍感さ

こうした自閉症スペクトラムの症状が、実際の就労場面においてどのようなトラブルを生じさせ、就労を困難にしているのかを事例を通して明らかにし、自閉症スペクトラムの子供たちに対して幼少期からどのような取り組みが必要か課題を明らかにしたいと考える。

2 方 法

(1) 対象児

障害者の就労支援施設において就労訓練を受ける自閉症スペクトラムの診断を受けている利用者(以後 A 君と表示する)を対象として、実際の就労におけるトラブル場面をとらえ、その根底にある自閉症スペクトラムの症状とトラブルの関係を分析するものとする。(本研究では、利用者 3 名の事例を A 君の事例として 1 つにして紹介する)

A 君は、3 名とも 20 歳代の男性で、医療機関においてアスペルガー障害の診断を受けている。

A 君の主な症状は、以下のような行動の特

徴を持っている。

①対人的・情緒的相互作用関係について

- ・相手の状況や思惑は受け止められず、自分中心の言動になってしまう。
- ・相手が気を悪くする、嫌な思いをするということには無頓着で自分の主張をしてしまう。

②対人相互反応に使用される非言語的コミュニケーション行動について

- ・自分の言葉に対して相手が顔をしかめたり、困った表情をしていてもお構いなく、自分の話をしたり、主張をする。
- ・指さしやダメ出しのジェスチャーが理解できず、ジェスチャーの意味や理由を聞いてくる。

③人間関係を発展維持させることについて

- ・自分の興味ある話（アニメ・映画・ゲーム）を聞いてくれる相手には、一方的に話しかけ楽しそうにしている。相手が話し始めると、すぐその話の緒をとらえ自分の話にししまい相手の話を聞かない。
- ・興味や関心を示さない相手に対しては、ほとんど話しかけることはなく、皆の会話に加わらない。

（2）指導期間と内容

本研究の期間は、平成 X 年 4 月から 2 年 6 か月である。

研究場所は、就労継続支援 B 型施設における、飲食業の接客、売店販売、農園作業、手芸制作などの就労場面である。当施設では、障害のある利用者が 20 数名働いており、A 君（3 名）はこの施設の利用者として働いている。

A 君は主に農園作業・売店販売に従事しており、5～8 人の利用者仲間と一緒に働くことが多い。また、その指導には 2～4 人の指導者が一緒に働いている。

3 名以外の利用者は、知的障害、発達障害、精神障害の診断を受けている子たちである。

（3）研究者

本施設で指導・支援を行っている筆者が、知的障害、発達障害、精神障害等を持つ施設利用者の就労体験や訓練を指導しながら事例研究を行った。

筆者は自閉症スペクトラム支援士 EXPERT の資格を有している。

実際の施設の指導・支援の場面では、施設職員が複数で関わって指導・支援を行っている。

3 結 果

A 君は、積極的でまじめに仕事に取り組むタイプの子たちである。仕事をする自分が自分の使命と考えているようなところがあり、常に体を動かし、サボることがない。しかし、自閉症スペクトラムの症状を起因とする仕事上のトラブルが生じる。そうしたトラブルを通して、彼の就労における困難を分析、就労における適応を図るための指導、支援の在り方を考えたい。

事例 1 「指示語が理解できない」

オープンカフェのためテーブル設置の準備をしている時のことである。前日の雨でぬれ

たテーブルを覆っていたブルーシートを外してもらった。外したブルーシートを手を持つA君に、「それを木の枝に干しておいてください。」と近くの木を指さして指示をする。

A君は、「それって何ですか」と聞いてくる。
「きみが今、手に持っているのは何ですか。」
「ブルーシートとゴムです。」
「干す必要のあるのは何ですか。」
「ブルーシートです。」
「じゃあ、それを木の枝にかけてください。」

こうした会話をする、ようやく自分のすべき行動が理解でき、ブルーシートを干しに行く。

ここでは、「それ」という指示語と指さすジェスチャーが、何を意味し、自分が何を指示されているかが理解できていない。

A君にとって、言葉の指示は、言葉として独立して受け止められており、一緒に示されるジェスチャーと関連付けて理解することが難しいようである。また、自分の行動している状況の中で指示を受け止めることもできていないようである。

一般的な就労場面では、状況に沿って会話が行われるので、「それ」とか「あれ」というのはその時の状況から推測し行動することが期待される。しかし、自分の置かれている状況や前後の関係と指示語が結び付けられない状況の中では、即座に反応ができず、指示内容を理解をするまでに、上記のような会話が必要となるのである。

自分が行動している状況と指示語を一元的に認識することの困難性は、自閉症スペクトラムの症状の一つと考えられる。また、その

場で示される指さしなどのジェスチャー（非言語的指示）の意味が理解できず、戸惑ってしまうのも自閉症スペクトラムの症状の一つと考えられる。

こうした症状は、就労場面で仕事の流れを停滞させ、余分な時間や手間をとらせることになり、その仕事からはじき出される原因となってしまう。

A君は様々な場面で何回も「それとは何ですか。」という反応を見せる。

例えば、サツマイモの分別をしているB君が、サツマイモを入れる籠を探していて、籠を持っているA君に籠を指さしながら、

「それをこっちに持ってきて。」と声をかける。

A君は、「それって何ですか。」といつものように答える。B君は思わず怒ったような表情になる。

こうした場合は、すぐ間に入って
「A君、君の手に持っているのは何ですか。」
「籠です。」

「今、B君は何をしていますか。」

「サツマイモを持っています。」

「B君は、サツマイモを入れる籠を探しています。君にどうして欲しいのかな。」

「・・・・・・」

「B君は籠がほしいんだよね。」

「はっ。そうですか。籠を持って行けばいいんですね。」

「はい、そうして下さい。」

こうしたやり取りは常に観察される。支援者の調整や言葉かけで大きなトラブルは避けられるが、A君の行動パターンを理解しないと、このような場面では、B君は「籠を持っ

て来いよ。」と怒鳴ったり、A君をなじるような言動、無視するような行動に出るのが普通である。

こうした関係は、単に仕事の停滞だけではなく、人間関係のトラブルに発展し、A君が職場に居られなくなったり、いじめやからかいの対象になってしまったりすることに繋がってしまう。

施設では、こうした状況を回避するために、「ブルーシートを木の枝に掛けておいてください。」とか「君の持っている籠をください。」というように、指示語を使わずに声をかけることを心掛けてもらっている。

しかし、一般就労の場では、こうした配慮はほとんど行われないのが普通である。幼少期から、会話を通して状況の理解が図れるよう、意図して声をかけ、指示語の意味を考えさせるように対応していくことが大切と考えられる。相手の動きをよく見て、自分の言われている意味を考えること。今、自分は何をしているのかを考えながら相手の話を受け止めること。こうした訓練が、配慮のない状況の中で、場面と言葉が結び付け、行動できるようにしていくことに繋がると思われる。

事例2 「判断力その1」

畑での農作業を終わり、カフェに戻って昼食を摂ろうとしている時のことである。A君が来て、
「私は、畑作業の後でこのハンケチで手を拭いてしまいましたが、食べ物扱うのにこの汚れたハンカチで手を拭いてもいいですか。」と聞いてきた。見ると、泥がついている訳でも、

目立った汚れがついている訳でもないハンカチである。

その場では、「自分で決めていいよ。」と自分で判断するように言う。しばらく考えてから、「まあ、病気になっても死ぬことはないだろう。」と独り言を言いながら手を拭いて食事に行った。

A君は、「汚れた手で食事すると病気になる。」「落とした物は食べてはいけない。」「汚れた物は使ってはいけない。」といった過去に受けた指導を、忠実に守ろうとしているのだろうと考えられる。しかし、子供のころに獲得した知識だけで、具体的な生活場面を乗り越えようとする、判断に困ってしまうことが起ってくるようである。

カフェの皿洗いをしていると、皿やカップについた小さな汚れや食器のキズが気になって仕事が停滞したり、支障をきたすことが起こる。

「この皿、汚れています。」と大きな声を出す。その声は客席まで聞こえ、お客の視線が集まってくる。その皿を点検すると、焼きムラで小さな黒いシミがついているだけである。

「これは、作る時にできてしまった傷で、使うのには問題はありません。」と言ってもなかなか納得できないようで、何回もゴシゴシ洗っている。

また、スプーンをお客様に持っていく時に、「アッ、食べる場所に触ってしまいました。洗った方がいいでしょうか。」と大きな声で質問してくる。

お客様が、一斉に振り向くのだが、その状況は目に入っていないようである。「洗ってく

ださい。」と指示はするが、そうした出来事の判断も自分では難しいようである。

カフェでは、その間に別のスプーンを他の従業員がお客様に届けなければならない、お客様に対しても、「申し訳ありません。」の声掛けが必要となる。

A君のこうした潔癖さやこだわりは、やはり自閉症スペクトラムの症状の一つと考えられる。また、自分だけでは判断できず、疑問がわくと、時と場合を考えずにすぐ言葉に出してしまうのもその症状のようである。

しかし、接客場面ではこれが大きな就労の支障となる。お客様に不快感を与えてしまうとともに、お店の信用に関わり、カフェの存続にも関わってくる問題となってしまうのである。接客の就労体験をさせてあげたいが、A君は接客を伴う仕事からは外さざるを得ないのが現状となっている。

A君のように幼少期に自分が獲得した価値観や判断基準を変えられない、臨機応変さに欠ける言動になってしまう、周りの状況や自分の置かれている立場が考えられないといったこれらの症状は、就労をより困難にしていることがわかる。

衛生観念や汚れに対する対応の知識は、獲得した後に幅を持たせ、許容範囲を持たせていく必要がある。その程度は大丈夫という許容範囲を理解させることは、困難ではあるが場面ごとの知識として許容範囲を理解し行動できるようにすることは可能である。

スプーンに指で触ったしまった例では、「君が手をよく洗い、清潔に保っていれば触っても平気です。」という知識を持たせると、「手

を洗ったから大丈夫です。」という行動がとれるようになってきている。

事例3 「判断力 その2」

農園の野菜洗いをしている時のことである、「アッ、ジャガイモを落としてしまいました。捨てます。」と言ってゴミ袋に捨ててしまう。「なぜ捨てちゃうの。それは食べられるよ。」と言うと、「ここに傷がついてしまいました。」と言って見せる。そこには、皮がめくれて少し白い肌が見えているジャガイモがある。「この程度は大丈夫。食べるのに支障はないでしょ。食べる時には皮はむくでしょ。」と言うと「傷がついているものを売っても、いいんですか。」と不満そうに答えてくる。

また、収穫したニラを洗って袋詰めをしている時のことである。

「この折れた葉はどうしますか。」

「この白い部分は取りますか。」

「この曲がった葉は、取ったほうがいいですか。」

と細かな点をいちいち確認に来る。

その都度、「これが見本」と言って一本のニラをみせて、「食べる部分が緑で枯れていなければ大丈夫です。」と教える。すると見本と少しでも違う折れた葉、曲がった葉は取ってしまう。

食べられる葉か、食べられない葉かの判断には、曖昧さがあって理解が難しく、食べられるかどうかという判断基準が理解できないようである。

「曲がっていても、途中が切れていても枯れたり腐ったりしていない葉は食べられるんだ

よ。」と言っても、きちんと形の整った葉以外の折れた葉や曲がった葉が食べられるかどうかの判断は難しいようである。

自閉症スペクトラムの症状には、曖昧なもの判断に対する難しさがある。色や形など決まった判断基準には対応できるが、食べられるか食べられないかという幾つかの要素から総合的に判断することには対応できないようである。

就労場面では、簡単な仕事は責任を持たせて任せることが多い。責任を持つということは、自分で判断するという他にない。

食べられるものでも捨ててしまう。聞くように言うと、自分で判断できないことは些細なことでも質問してくる。こうしたA君の状況は、仕事を任せられない、責任を持たせられないことになり、就労が困難になってしまうということを示している。

野菜を洗うことや枯れたり腐ったりした葉を見分ける能力はあり、この仕事をするための基本能力はある。しかし、折れたり曲がったりした葉の微妙な判断を必要とする仕事ができない。

また、落としたジャガイモも皮をむいてしまうので、何の問題もないこと。少しのキズは調理してしまえば問題がないことなどの知識や判断力のないことは、生活そのものが一人ではできないことを物語っている。

こうした、判断基準も知識として具体的な場面を通して体験的に獲得していく以外にない。本やテレビ、新聞などのメディアを通しては獲得できない、学校では教わらないことである。体験や経験が絶対的に不足している

のも自閉症スペクトラム児の症状であり、就労の妨げとなることから、幼児期からの生活体験がいかに重要かがわかる。

体験を通してしか獲得できない能力について、自閉症スペクトラムの子の指導に当たっては、十分配慮していくことが求められているといえる。

事例4 「集団の中での行動」

畑作業には休憩、休息の時間がある。仕事がひと段落してお茶を飲みながら休憩するのであるが、皆が集まってくるとA君は、「さあて、30秒で食べて僕は仕事に行きます。」と大きな声で宣言する。

「A君、休憩時間は、みんな一緒に休む時間なんだよ。」と言うと

「僕はいいです。皆と話すこともないし、少しでも仕事をしたほうが皆の為だと思います。」と言って聞かない。

「休憩時間は、話をする時間ではなく、体を休める時間ですから、一緒に休んでください。」

「エーッ。僕は疲れていません。なぜ休まないといけないんですか。少しでも働く時間を多くした方が皆の為だと思います。その方が経済的だし、カフェの儲けも増えます。」と言って、出されたお菓子をさっと食べると、立ち上がって草取りに行ってしまうのである。

こうした、集団に交わりとしない頑なな態度は常にみられる。人を避け、自分の世界を持つようとしている行動のように見える。

しかし、常にこうした態度をとるかというと、別の日には、自分の好きな映画やアニメの話のできるC君が一緒だと進んで休憩にき

て、周りの話に関係なく「あの映画のあの場面は、……。あのゲームの攻略は……」と際限なく話しを続け、休憩時間が終わっても立ち上がろうとしないこともある。

こうした行動は、自分に都合のいい理屈をつけて、集団場面を避けようとする一方で、自分の興味や関心のある話題で話せる相手がいたり、聞いてくれる相手がいると、それまで言っていたことと全く逆の行動をしてしまう、自閉症スペクトラムの症状の一つである。

また、そうした行動の一貫性のなさを指摘されても、自分のしていることの矛盾には気づかず、理解ができないようで、自分の行動の何が悪いのか考えられないようである。

こうした行動は、周りからは行動に一貫性がないとしてとらえられ、自分勝手に行動していると受け取られてしまう。

自分から人との関りを避け、自分のペースで仕事をしようとする反面、自分の興味関心の高い話ができる場面になるとそれまで言っていた主張を翻してしまう。そして、自分がその矛盾に気が付けないところが対人関係を営む上での大きな課題になっており、就労上の人間関係が形成できない原因になっている。

自閉症スペクトラムの子の幼少期は、自己中心的言動で孤立していることが多い。自分の興味関心のないことには関り持とうとせず、自分の興味関心のあることに対してはマニアックな言動をしてしまう。こうした特徴が、就労場面では仲間関係を形成したり人間関係を維持することを阻害してしまう。人との関わり方についても、幼少期から知識として行動パターンを形成していく必要があると考えられる。

事例5 「共同作業、協力する作業」

のこぎりで木を切る時に、木を押える役をさせる。そうした時A君は、切る人の様子に関係なく、単に木を押えているだけである。「もう少し木をこちらに出して」とか「木を少し回して持って」などという指示には、「わかりません。どうしたらいいですか。」と戸惑っている。

こうした場面でも、相手の求めている状況が理解できず、自分がどうすれば相手が助かるのか、相手が何を求めているかを想像する力が働かないためにトラブルが起きていると考えられる。

共同でやる仕事では、相手の動きを見て相手のやり易さを考え、補助することが求められる。しかし、そうした状況で、相手の求めている補助を想像したり思いやったりする気働きに欠けているのが自閉症スペクトラムの症状である。

共同作業場面では、気働きができないと仕事がやりづらくなり、誰もが一緒に作業することを避けてしまうので、結局孤立して一人でできる草取りなどの仕事をせざるを得なくなってしまう。

こうした孤立を防ぐために、できるだけ作業の手伝いをさせるようにするが、「皆と一緒に、疲れるから」とか「話すこともありませんし」というように対人関係を避け、一緒に作業することを拒否するような言葉が返ってきてしまう。

自分が仕事のパートナーに選ばれないことに対して、人を避ける言動をしてしまうのは、

実際は相手と仕事をしたいが、仕事になると意思の疎通が図れず、挫折した感じを持ってしまうことが原因となっているようである。

就労場面では、自分に合わせてくれる相手は少なく、自分が相手に合わせることを求められる。人に合わせる力の弱い自閉症スペクトラムの子の共同作業は大きな困難を伴っている。

こうした状況からは、幼少期から家事の手伝いや補助を積極的にさせることの必要性がうかがえる。補助の仕事はどういうものか、気働きとはどういうことかを体験させていくことが、将来の就労を可能にさせることにつながっていくものと考ええる。

4 考察

自閉症スペクトラムの症状は、社会的コミュニケーション及び対人相互作用における持続的欠陥とされ、その症状が具体的な場面で、どのような困難をきたすかの事例を通してとらえてきた。その結果から就労の困難性と幼少期からの指導の在り方について考察する。

(1) 事例1「非言語的コミュニケーションの獲得と理解」

事例1では、指示語の理解とジェスチャーを結びつけることができないことによる就労の困難性を取り上げた。A君は、言語でコミュニケーションをとる時には、言語で表現される内容にのみ反応していて、その前後の自分の行動や置かれた状況などと結びつけて理解しようとしていない。

これは、社会的コミュニケーションの欠如といわれる症状に繋がっているものと思われる。会話をする時には、会話相手の示すジェスチャーや自分の現在進行形の行動が言葉以上に重要なコミュニケーション手段になっている。自閉症スペクトラムの子の会話では、言葉だけが独立してやり取りされているため、こうした現象が起きていると考えられる。

これは見方を変えると、聴覚からの刺激と視覚からの刺激を統合して反応する機能に問題があると考えられ、自閉症スペクトラムの症状が脳の機能障害であるということを示す事例ともなっていると思われる。

こうしたことから、幼児期から会話をする時には、自分の現在進行形の行動を認識させたり、相手のジェスチャーに注目させる支援をしたりして、言葉と状況を結び付けて理解する訓練が必要と考えられる。

事例で取り上げたように、「今、君の手に持っている物は何ですか。」「干す必要のあるものは何ですか。」といった質問で自分の行動に目を向けさせ、意識させることで「それ干しておいて」というに指示内容を理解させていくプロセスをとることが有効である。

また、「指さしている先にあるものは何」と聞くことで、ジェスチャーに注目させ、その意味に気づかせることも必要である。

こうした支援を通して、会話をする時には、聞いた言葉を自分の現在進行形の行動や相手のジェスチャーと結び付けて認識することを知識として定着させることができ就労の可能性を広げていくと考えられる。

ちなみに、A君はこうした言葉かけの中で、

指示語の「あれ」とか「それ」「そこ」という指示に対し、少しずつ考えるようになり、「あ、こうすればいいんですね。」という反応ができ始めている。

（２）事例２「過去に形成された知識の変更」

事例２では、自分で判断することの困難さについて事例を取り上げた。自閉症スペクトラムの症状を持つ子は、自分が過去に学んだ知識をそのまま判断の基準にしており、応用とか状況に合わせて臨機応変に対応することが苦手である。

A君は、知識として、「汚染されたものは病気の原因になるから食べてはいけない。」「落ちたものは食べられない。」という情報がインプットされている。

この知識を、具体的な場面に当てはめると、「農作業で使ったハンカチは、使えるかどうか」「落としたジャガイモは食べてよいか。」「皿についた点はゴミではないのか。」といった時に、自分だけでは適正な判断ができない状況になってしまっている。

また、そのことが気になると自分が今、している仕事の状況を忘れ、接客の場であるとか接客中であるという状況に関係なく、大きな声で「どうしよう。」「どうしたらいいのだろう。」と口走ってしまうのである。

この判断のできなさは、自閉症スペクトラムの症状の中の「異常な強さの焦点を絞った限定された興味」という特徴と共通していると思われる。食事場面や食物を扱う場面では、衛生（汚れ）に関する内容に興味関心がいついて、他の状況には興味や関心が向かなく

なってしまうものと思われる。

こうした行動の形成は、幼少期のしつけの時期にあると考えられる。乳幼児期には汚れに対する潔癖な反応は歓迎される。また、何でも口に入れてしまう乳幼児期は、保護者は常に注意が必要であり、落としたものは食べないとか、汚れたものを口にしないというしつけを行い好ましい反応として強化されてくる。

しかし、こうした知識は、その後の生活の中で徐々に幅や許容範囲が出来上がってきて社会生活に適した判断基準に変わっていくのである。ところが、自閉症スペクトラムの子においては、行動がどこかで修正されるということが起こらず、そのまま成人になってしまうので不適切な言動になってしまう。

臨機応変さや応用の苦手な自閉症スペクトラムの症状を持つ子らにとっては、一度刷り込まれた知識や観念は容易に変更できない。実際の生活場面にその知識を当てはめると、不適応行動になってしまうことが、事例からわかる。

A君に対しては、その都度に理由を説明し、考えさせるように対応し、場面に応じた行動の仕方を知識として理解させ、行動の定着を図っている。

接客時は、お客様のことが第一で、お客様に不快感を与えたり不愉快な思いをさせないことが大事だという知識を持たせる。仕事では、大切にしなければならないことが幾つもあるが、それらには優先順位があることも知識として持たせる。衛生に気を使うことは大切だが、そのために、大きな声を出すことは、

お客様には不快なことなのでしてはならない。そうした場面では、近くの人に小声で聞くことなどを知識として持つようと説明し、支援している。

幼児期に獲得した知識が固定してしまうことの多い、自閉症スペクトラムの子に対しては、より細かな対応マニュアルを知識として持たせ、その対応に優先順位を与えて、自分の行動をコントロールする能力を持たせていくことが重要と考えられる。

(3) 事例3「認知、弁別機能の課題」

事例3では、野菜の色や形など判断基準が単一でない、曖昧なもの、言語表現だけでは判断基準が明確に示されないものに関する判断の困難さの問題である。

畑でとれた野菜は、工場で製造される製品と違って規格が一定ではない。判断基準は「食べられるか、食べられないか。」「使えるか、使えないか」といったもので、複数の要因を総合的に判断する経験や知識が必要である。

自閉症スペクトラムの症状を持つ子は、こうした状況の時、判断する手がかりをほとんど持っていないように見える。

自閉症スペクトラムの症状の「感覚刺激に対する過敏さ、または鈍感さ」の中の鈍感さに当たるかも知れない症状である。ニラと雑草の見分けで戸惑う彼らには、植物の弁別に対する視覚情報の処理能力に鈍感さがあるのではないかと考えられる。

一緒に働く多くの子たちは、一度の体験でニラと雑草が見分けられるようになるし、ニラの「食べられる、食べられない」の状態を

見分ける学習が成立する。それに対して、A君はなかなか学習が成立せず、判断基準が認識できない。

ニラは、葉の色や艶を第一の基準とし、形は大きな基準としていない。しかし、A君は形にこだわり、折れていることや曲がっていることに注意が行く。その上、色にこだわってかすかな色の違いや付いている汚れに目が行って判断に迷うようである。どの情報を取捨選択し、捨象したら良いかの判断ができていないといった、物を見る時の分析力に原因がありそうである。

A君については、判断は色を見て行うことだけに焦点を絞ってあげることでかなり改善されるようになった。

自閉症スペクトラムの子は、判断が曖昧で難しいものは、保護者や周りの者が補助することでその場を乗り越えさせることが多いので、自分で判断する体験が不足しているようである。幼児期からの多様な体験を積み重ねることの大切さがわかる。

また、判断の基準を単純化して提示することで、こうした問題に対応することが、彼らにとっては支援となる。

(4) 事例4「人間関係の発展と維持」

事例4では、人間関係を発展させ維持することの困難さを取り上げた。

自閉症スペクトラムの子の人間関係は、彼らの持つ興味関心の上に形成されているように思われる。自分の興味や関心の無いことについては、どのような場面においても人との関係を持つとしない。逆に、自分の興味や

関心のあることに対しては進んで関係を持つようとしてくる。

まず、自分から人間関係を作ろうとする時、A君が聞くのはアニメや映画、ゲームのマニアックな内容を知っているかどうかである。相手が、それに関心を持っていないことがわかるとそれ以上の働きかけは見られない。相手が、少しでも関心を見せると持っている知識を際限なく披露して、関係を持つようとしてくる。

こうした人間関係を見ていると、互いが自分の言いたいことを一方的に言い合うだけで、相手の言うことはほとんど聞いていないようである。聞いてくれる相手は求めるが、話して来る相手は苦手なようで、次からは避けるようになる。

自分が話すのには熱心であるが、相手の話に共感して聞く様子が見られない。したがって、それ以上の関係に発展していかないのが彼らの人間関係の特徴である。

こうした、行動のパターンが日常生活の中では、事例の4で示したような状況になってくる。働く仲間という意識が持てず、自分の役割だけを果たせばよいと考えて行動している。しかし、自分の興味関心の前では、役割を忘れて、興味関心の方になってしまう。その時に行う言動に矛盾が生じていても、自分では気づかないので、周りの仲間からは浮き上がってしまう。

こうした仲間からの疎外感は、感じているようで、自分で仲間から外れていく行動をとってしまうことが多くなっている。「飲み会は行きません。」「休憩は必要ありません」と言って、

皆と一緒に行動を拒否してしまう。

人間関係を作る時から、自分の興味関心が中心で、関係を維持する上でも興味関心の共通性が必要で、自分が満足できるかどうかはその場にいるかどうかの判断基準になっているのが、自閉スペクトラムの子の主症状を形成しているようである。

この点を変えるように働き掛けをしてもほとんど効果がない。

唯一、効果があるのは話を合わせて聞いてあげることである。話を聞いてあげると、仲間のいる場に加わり、時間を過ごせる。しかし、自分の興味、関心なしには人間関係の発展や維持は、困難なようである。

(5) 事例5「共同作業の困難さ」

事例5では、相手を思いやるとか相手の手助けをすることの困難さについて取り上げた。

自閉症スペクトラムの症状の「対人的、情緒的相互作用の欠落」といわれる内容である。この症状は、相手の感情を理解したり、立場を尊重したりすることの困難さを示している。

この欠落は、就労場面で、事例5の様な状況として観察できる。

2人組、3人組で仕事をする時は、補助をする役割を求められることが多い。仕事の補助というのは、簡単なようで、案外気を使わなければならないことが多い。これを「気働き」と呼ぶが、この「気働き」が共同作業では働きやすさを作り、仕事の効率を向上させる。

共同作業における「気働き」とは、相手が何を望み、自分がどう動けば相手の仕事がしやすいかに気づくことである。自閉症スペク

トラムの症状では、この能力が欠如していることが診断基準になっている。したがって、「気働きがない」ことが自閉症スペクトラムであることの、必要条件となっているのである。

「気働き」のできないことが、共同作業を難しくしていることを物語っているが、共同作業や協力して仕事をする力は就労の為に養成していかなければならない能力である。

そこで、本施設では、大根洗いなどの作業で、仕事は個人であるが、場所は一緒という並行作業に取り組ませることから訓練している。「バケツに水を入れてください。」とか「タワシ貸してください。」といった会話を交わしながら作業を行う。作業の中で、時々関わりを持つ必要があり、相手の為にしてあげなければならないこと、自分がしてもらわねばならないことを体験させながら、協力ということに気づかせていこうとしている。

また、「気働き」に気づかせるために、A君にノコギリで木を切らせ、それを補助してあげる場面を通して、補助してもらうことの体験をさせている。補助してもらう立場を体験させることで、補助の仕方を理解させることをねらいとしている。

こうした活動を通して、協力とか補助ということを知識として持たせ、「気働き」の形成を図っていこうとを考えている。

幼児期から、こうした体験は必要である。障害のある子に共通しているのは、何かをする時にはいつも、補助役や見学役をさせられている。自分が主役で、補助してもらう体験はほとんどしていない。こうした体験の不足の中では、補助をする時の気遣いについて気

づくことはできないのは当たり前であろう。幼児期からの体験を積み重ねておくことが就労に役立つことは言うまでもない。

自閉症スペクトラム児の就労においては、その症状から起こる様々な困難がある。その症状の改善と克服については、就労の場を通して体験的に習得させていくことが重要と考えられる。

また、今回の事例からは、幼児期から就労に向けて多様な体験を積み重ねることが重要であり、教科書の知識や読み書きの学習を積み重ねることだけでは、就労の為に能力を高めることできないことがわかった。

<参考文献>

- 高橋三郎 大野裕監訳 染谷俊幸 神庭重信
三村将 村井俊哉訳 DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引き 医学書院 2014 医学書院
高橋三郎監訳 染谷俊幸 北村秀明訳 DSM-5 診断面接ポケットマニュアル 2015 医学書院
理化学研究所 脳科学総合研究センター編
つながる脳科学 2016 講談社